第 38 号

遺跡に学ぶ

シリーズ 1　自然災害と遺跡 2

古代～近世の自然災害

古代の群馬を襲った内陸型地震 ―弘仁の大地震―

平安時代末期の浅間山大噴火を乗り越えた人々

天明三年浅間焼け ―浅間山大山災害と復興への足跡―

古代～近世の自然災害により被災・埋没した主要遺跡一覧

お知らせ

最新情報展第 1 期

平成 26 年度最新情報展第 1 期は、富岡製糸場と絹産業遺跡群が世界遺産に登録される可能性が高まったのを記念して、『**発掘された群馬の絹・繊維産業の歴史**』展を開催します。

絹やその他の繊維産業は、弥生時代から行われてきました。これまでの発掘調査で、弥生時代～古代の糸を撚る道具の一部や、江戸時代の繭が付いた団扇などが出土しています。また、近現代の屑糸紡績所の煉瓦積護岸遺構という珍しい遺構も出土しています。今回の展示では、県内の遺跡で出土した絹・繊維産業関連の遺物や写真を展示し、発掘で明らかになってきた歴史のひとこまを解説します。

【展　示】

◆期　間：6 月 1 日 (日) ～ 8 月 29 日 (日)　午前 9 時～午後 5 時
　　土曜・祝日は休館

【講演会とギャラリートーク】

◆期　日：6 月 29 日 (日)　午後 1 時～ 3 時
◆演　題：『**発掘された群馬の絹・繊維産業遺跡**（仮題）』
◆講　師：齋藤利昭・大西雅広 (当事業団職員)
◆定　員：100 人 (先着順)

【共通事項】

◆会　場：群馬県埋蔵文化財調査センター発掘情報館（渋川市北橘町）
◆費　用：無料
◆申し込み：不要。当日、直接会場にお越し下さい。
◆問い合わせ先：(公財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団普及課
　　電話　0279-52-2513

メールによる行事案内のお知らせ

当事業団では年間を通じて展示会や講演会など様々な行事を催しています。メールによるこれらの案内をご希望の方は、下記のアドレスよりお申し込み下さい。

なお、受付の事務処理上、件名は『**行事案内希望**』とし、あわせて本文に『**住所・氏名・電話番号**』をご連絡下さい。

●メールアドレス：gunmaifukyu@apricot.ocn.ne.jp
●ＱＲコード

※携帯アドレスへの連絡をご希望の方はパソコンからの着信ができるように設定して下さい。

表 紙 解 説

平成 13 年度より発掘調査された上郷岡原遺跡（吾妻郡東吾妻町）からは、厚く残る泥流の下より、天明三（1783）年当時の村が現れた。

写真は、泥流下より見つかった畑跡である。白く縞状に見えるのは、天明三年に降った浅間 A 軽石の残る畝間の溝。見つかった畑跡の一角には、耕作物の根や茎の一部も残されていた。

本誌は、学校および教職関係者向けの埋蔵文化財情報誌です。学校の授業等で誌面内の文章・写真・図面をコピー利用する場合は著作権フリーです。それ以外でのコピー利用は禁止します。
ご意見・ご質問は右記あてに連絡をお願いします。

「遺跡に学ぶ」第 38 号
平成 26 年 3 月 31 日発行
公益財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団
〒377-8555 渋川市北橘町下箱田 784-2
電話番号 0279-52-2513（普及課直通）

公益財団法人
群馬県埋蔵文化財調査事業団
http://www.gunmaibun.org/

古代～近世の自然災害

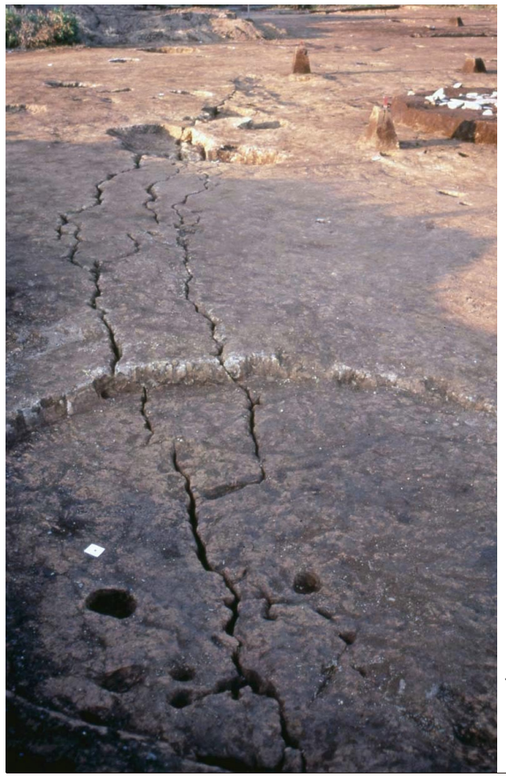
高井　佳弘

前号では古墳時代の火山災害を取り上げたが、今号では平安時代から江戸時代にかけて起こった自然災害について紹介する。

この時代にも群馬県は数多くの自然災害に見舞われた。発掘調査によってその存在が知られているのは、地震、火山噴火、そして洪水である。これらの災害は文字資料や絵画資料にも記録されているが、遺跡に残されている痕跡からは被害の程度と範囲、その復興の状況など、災害の様子を具体的に知ることができる。

平安初期の大地震

平安時代初頭の弘仁九（818）年には関東地方の内陸部で地震が発生し、群馬県に大きな被害を与えた。この地震によるとみられる痕跡が県の南部と埼玉県北部の遺跡に残され、地震後に発生したらしい洪水の跡は県内の平野部の遺跡に見ることができる。



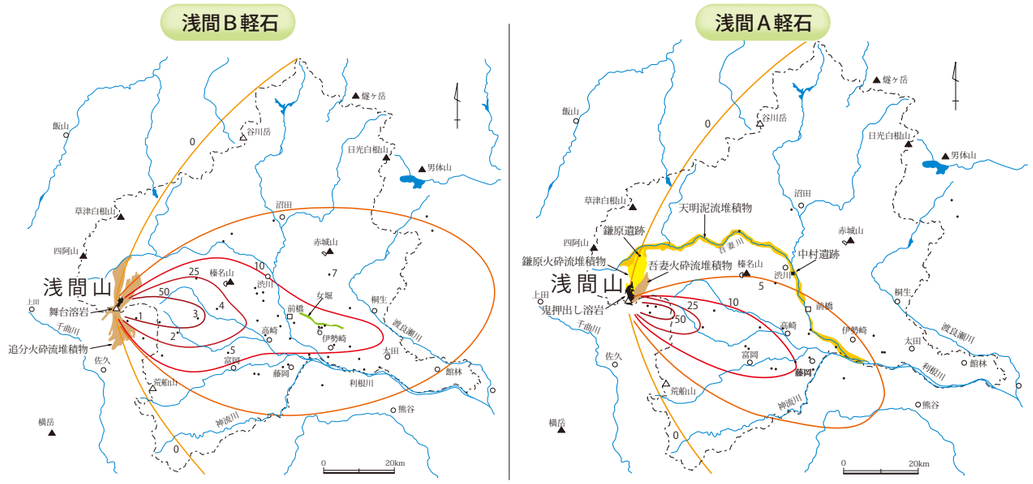
◀弘仁の地震による地割れ
前橋市市之関前田遺跡で見つかった地割れ。赤城山南麓の多くの遺跡にはこのような地割れが残されていて、当時の地震被害の大きさを今に伝えている。

浅間山の２度の大噴火

古墳時代初頭に噴火した浅間山は、平安時代以降にも２回の大噴火を起こしている。平安時代後期の天仁元（1108）年には県内に大量の軽石を降らせ、平野部の田畑を壊滅させた。

江戸時代の天明三（1783）年に起こった噴火では大量の軽石を噴出しただけではなく、大規模な土石なだれ、泥流を発生させ、山麓や吾妻川・利根川流域の村々に甚大な被害をもたらした。

▲浅間Ｂ軽石で埋もれた平安時代後期の水田
前橋市西田遺跡で発見された水田の跡。白い線が水田の畦畔で、条里制によって規則的に区画されている。浅間Ｂ軽石で埋没した水田は県内の平野部で広く見つかっている。



浅間Ｂ軽石（As-B）、Ａ軽石（As-A）の降下範囲
天仁元（1108）年に噴出した軽石は浅間Ｂ軽石（As-B）、天明三（1783）年に噴出した軽石は浅間Ａ軽石（As-A）と呼ばれ、上空の偏西風に乗って東側の群馬県内に広く降下した。

洪　水

県内における洪水被害といえば、戦後昭和 22（1947）年のカスリン台風が広く知られているが、県内には利根川、渡良瀬川などの大河川が流れるため、古代から近世にも多くの洪水が発生した。中世・天文年間（1532 ～ 1554 年）の洪水では、利根川の流路が広瀬川低地帯から現在の流路に移ったとされている。「関東の華」と謳われた前橋城も、利根川の浸食に堪えられず、江戸時代には取り壊されていた時期まであった。

高崎市東部から前橋市南部にかけての水田地帯で遺跡の発掘調査を行うと、地下１m以上にも及ぶ深さから古墳時代や古代の水田跡が見つかることがある。何回も発生した洪水の堆積物によって、現代までにそこまで埋もれてしまったのである。

前橋城の絵図
寛延二（1749）年に松平氏が入封した後の前橋城。すでに利根川の浸食によって城の西側がかなり削られている。この後、明和四（1767）年に松平氏は川越に移り、城は取り壊されてしまう。（提供：前橋市教育委員会）

災害を語り伝える意味

現在群馬県は自然災害が少ない県だとされ、それを自慢にする県民も多い。しかし、長い歴史を振り返ってみれば、この群馬県にも自然災害は繰り返し襲ってきたのである。もちろん災害をいたずらに恐れることはないが、過去にどのようなことがあったかを知ることは今後の防災・減災に必ず役立つはずであり、それを後世に伝えていくことは現代に生きる我々の責務と言えるだろう。

古代の群馬を襲った内陸型地震 －弘仁の大地震－

高井　佳弘

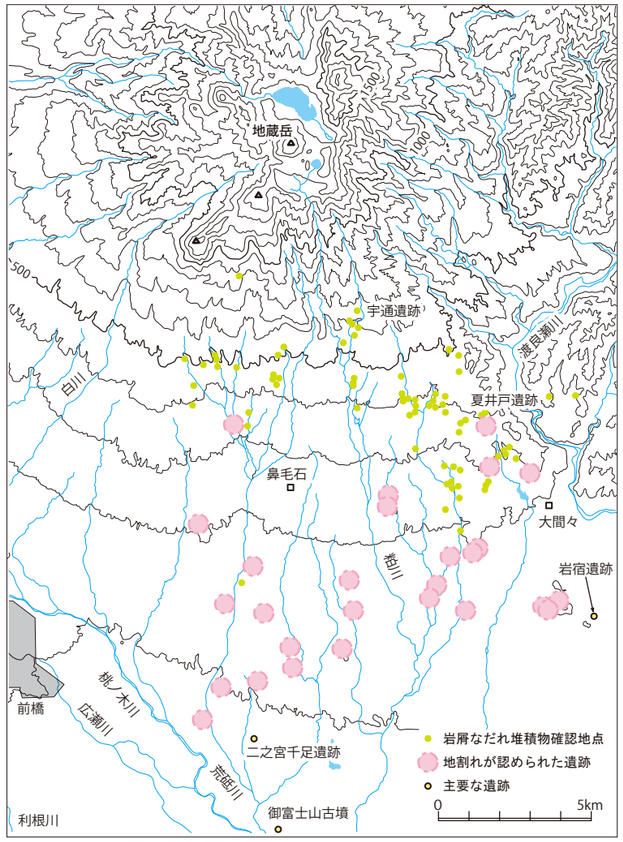
県内の赤城山南麓から榛名山南西麓とその南側の平野部、および埼玉県北部の遺跡で、地震によると思われる地割れや山崩れ、噴砂の跡が数多く発見されている。出土遺物などによる詳細な検討の結果、その地震は平安時代の初期に起きたものであることが分かり、現在では『類聚国史』（下欄参照）に記事が残る弘仁九（818）年の地震であることに間違いないと考えられている。地震の規模はそれらの痕跡からマグニチュード 7.5 かそれ以上と推定されているが、この時活動した断層がどこかは、まだ確定していない。また、赤城山の谷の下流では、ほぼ同時期の洪水堆積物に埋もれた水田が見つかっている。山崩れが赤城山南麓の沢筋に土砂ダムを作り、その崩壊によって洪水が引き起こされたらしい。

渋川市半田中原・南原遺跡の地割れ
この遺跡の地割れは特に大きく、最大のものは幅４～６m、地面からの落差２mにも及び、地震の揺れによる被害の深刻さを伝えている。
（写真提供：渋川市教育委員会）

弘仁の地震による地割れ
昭和 55（1980）年に桐生市天笠南遺跡で発見された地割れ。県内の地震痕跡の探求はこの発見から始まった。
（写真提供：桐生市教育委員会）

『類聚国史』
有名な菅原道真が寛平四（892）年に編纂した歴史書。六国史の記事を部門別に分類したもので、この中に本来は『日本後紀』に収められていたはずの弘仁の地震の記事が残っている。

前橋市青柳宿上遺跡の噴砂（矢印）
噴砂は地震の揺れによって地中の砂礫層が液状化し地上に噴出する現象で、東日本大震災で数多く発生したことで広く知られた。弘仁の大地震ではそれが県内でも数多く発生している。



赤城南麓の地震地形と関連遺跡
関連の遺跡が赤城南麓に広く分布していることが分かる。

高崎市三ツ寺Ⅱ遺跡の地割れ
古墳時代後期の竪穴住居を破壊する地割れ。この遺跡では弘仁の地震のほか、古墳時代の榛名山の噴火に伴う地震によっても地割れが起きたらしい。

前橋市中原遺跡群の水田跡
地震後に起きたと考えられる洪水の堆積物によって埋没してしまった水田。

平安時代末期の浅間山大噴火を乗り越えた人々

神谷　佳明

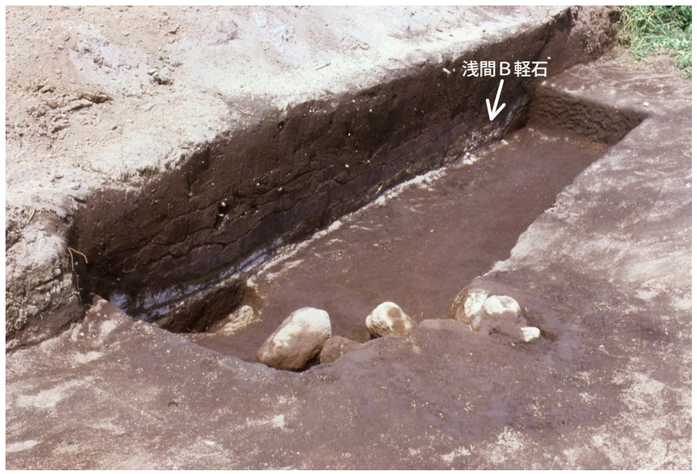
再び大噴火した浅間山

群馬県の平野部では、冬の晴天時にで覆われた浅間山の雄姿を眺望することができる。この浅間山は最近でも小規模な噴火を繰り返し、噴煙と共に軽石や火山灰を降下させているが、平安時代の末期には大量の降下軽石を伴う大噴火があった。この軽石は「浅間Ｂ軽石（As-B）」と呼ばれ、県内の水田や畠を埋め尽くしただけでなく、その被害は栃木県足利市まで及んだ。

この浅間山噴火は「中右記（ちゅうゆうき）」の文献記録から、天仁元年（1108）であることが判明している。

高崎市同道遺跡の土層断面

３世紀後半の浅間山や６世紀代の榛名山の噴火に伴う火山灰・軽石で水田が被災・埋没しているが、その都度復旧されている。浅間Ｂ軽石も 20 ～ 30cm の厚さで堆積し、災害規模の大きさが窺える。



高崎市後疋間遺跡 16 号住居

浅間Ｂ軽石で直接被災・埋没した住居の事例は少ないが、16 号竪穴住居の床面には厚さ 30cmの軽石堆積が見られる。水田などに堆積した場合に比べて後世の攪乱がなく、降下当時の状況を良く留めている。現在の前橋市元総社町に存在した上野国庁にも同程度の堆積があったと考えられる。　（写真提供：高崎市教育委員会）

古文献に見る浅間噴火の様子

平安時代末に起きた浅間山の噴火については、当時の貴族・右大臣藤原宗忠の日記「中右記」にも記録されている。

この記述によれば「近頃上野国の国司が報告してきて言うには、国の内に麻間峯という高山があり、治暦年間（1064 ～ 1069 年）より細い噴煙がたちのぼっていたが、その後、わずかなものとなっていた。ところが、今年（天仁元年）七月二十一日に爆発し、猛火は山嶺を焼き、その噴煙は天にも届かんばかりで、砂礫が国中に降り注いだ。それは、国庁の庭にも積もる有様で、国内の田畑は既に壊滅し、一国の災害としてはいまだこのようなことは経験したことがない。」という甚大な災害であった。

天仁元年九月五日、壬子
左中辨長忠於陣頭談云、近日上野國司進解狀云、國中有
高山稱麻間峯（南條浅間峯）、中細煙出来、其後微々也、從今年七
月廿一日猛火燒山嶺、其煙屬天沙礫滿國、煨燼庭、國
内田畠依之已以滅亡、一國之災有如此事、依希有之
径所記置也、
廿三日
今日午後許有軒廊御卜、上卿源大納言、俊、上野國言上
麻間山峯事、
十月六日　壬午
蔵人辨仰云、近日天變頻示、径異屢侵、依如此事、可被
行非常赦、
早可令作詔書、但觸伊勢太神宮并八幡宮訴者、非免原限、

『中右記』の浅間山が噴火したときの記事

『中右記』天仁元年９月５日の条、「中右記」は現在宮内庁が所蔵している。

各地の被災状況と復旧

県内の各地では、この浅間山噴火によって被災した水田や畠地が数多く検出されているが、被災後に見事に復旧を遂げている事例もある。そうした状況を代表的な遺跡で見てみよう。

高崎市下芝五反田遺跡　奈良時代から平安時代前期には集落だった場所を用水路の掘削により水田耕地化したが、浅間Ｂ軽石により被災・埋没している。

その後、あまり時間を置かずに新たな用水路を付け替えて、この水田復旧が行われている。

また、浅間Ｂ軽石が堆積した上面には、小規模な堂宇状の建物が検出され、その内部から鏡面に阿弥陀如来と地蔵菩薩が毛彫りされた鏡が出土している。おそらく火山災害などの除災を祈願するために建てられたのだろう。

浅間Ｂ軽石で埋没した用水路（左）、復旧された用水路（右）

下芝五反田遺跡の浅間Ｂ軽石で埋没した水田跡

発掘調査は調査範囲を分割して行っている。西側（左手）と北側（手前）にも広がる。

復興と平安を祈願するために建てられた堂宇跡

阿弥陀如来像と地蔵菩薩像が彫られた鏡

沼田市下川田平井遺跡　浅間B軽石で埋没した水田は、傾斜地のわずかな平坦部を利用して造られており、その下層には榛名二ッ岳軽石や平安時代の洪水で被災した水田も検出されている。しかし、当遺跡では明確な復旧の痕跡は見られず、再び水田化するには相当の時間を要したと考えられる。

下川田平井遺跡の浅間Ｂ軽石で埋没した水田跡 (奥は利根川)

前橋市西田・横手湯田遺跡　当地域は古墳時代前期に水田開発され、奈良・平安時代には班田を効率的に実施するための条里制地割りが施工されている。

横手湯田遺跡では、近世から古墳時代にかけての文化面が、約 50cm 厚の堆積土層の中で 13 面検出されている。浅間Ｂ軽石およびそれに埋没した水田は、上から 11・12 番目の層位で、地表面からは約 30cm ほど下位となる。また、この直上から洪水で埋没した水田が検出されているが、その畦畔の走向は浅間Ｂ軽石の埋没水田の畦畔をほぼなぞるようにあり、被災後余り時間を置かずに復旧が行われたことを物語っている。

横手湯田遺跡の浅間Ｂ軽石で埋没した水田跡
アゼの方向はほぼ東西、南北に走行している。

横手湯田遺跡の浅間Ｂ軽石で埋没した上位で見つかった水田跡
区画はやや異なるが、アゼの方向はほぼ一致している。

復興と社会の変貌

浅間山が噴火した 12 世紀初頭は、律令制が形骸化し、社会も大きく変貌し始める時期である。中央では院政が始まり、地方では受領が国を治め、土地制度も私領化に拍車がかかり各地で荘園が出現してくる。そうした状況下での浅間山噴火による耕地の荒廃は、上野国内の再開発を目的とする荘園化を促進させるが、それを象徴する遺構に「女堀（おんなぼり）」がある。

女堀は赤城南麓の標高 97.5 ～ 90m付近を西から東方向に、延長約 12km、幅 20 ～ 25mにわたって掘削した巨大な用水路である。取水点と送水終点については複数の説があるが、現在確認できる範囲は前橋市上泉町から伊勢崎市西国定までの間である。発掘調査により、当時の掘削工事による排土の下から浅間Ｂ軽石の堆積が確認され、その開削が天仁元（1108）年に近い 12 世紀前半に行われたことが判明した。また、何らかの理由で工事は中止され、通水することなく未完成のままで終わったことも分かった。

女堀に関する文献は残っていないが、渕名荘の開発を目的に在地領主の秀郷流（ひでさとりゅう）藤原氏によって計画・掘削されたとする説が有力だ。

空から見た女堀　中央の細長い帯状の区割りが女堀。

発掘調査された女堀

復興後の上野国

浅間山噴火による被災後、上野国内では荒廃して「空閑（くうかん）の郷々」と化した耕地を再開発する動きが盛んになる。この結果、在地領主は再開発した耕地への租税を逃れるため、皇室につながりをもつ寺院や摂関家など中央の権門に寄進して荘園が成立していく。

その代表的なものとして、元永二（1119）年に関白藤原忠実の家司である平知信が、上野国内で再開発した五千町歩に及ぶ広大な耕地を忠実に寄進しようとしたが、白河法皇から止められている例がある。また、天承元（1131）年の高山御厨（御厨は天皇の食事を調進する所領や伊勢神社や賀茂神社の神領を指す）、康治二（1143）年の土井出・笠科荘や簗田御厨、保元元（1156）年の園田御厨、保元二（1157）年の新田荘などをはじめとして、平安時代末までに 27 の荘園が成立している。

このような激しい社会変動の背景には、浅間山の火山災害が大きく係わっており、時代は古代から中世へと変貌していく。

天明三年浅間焼け －浅間山火山災害と復興への足跡－

黒澤　照弘

天明三年の火山災害

「浅間のいたずら鬼の押し出し」でも知られる浅間山は、幾度となく噴火を繰り返してきた活火山である。なかでも天明三（1783）年の噴火は、江戸時代で最大の、浅間山による被害をもたらした。

天明三年の噴火活動は、五月八日または九日（日付は新暦）より始まる。その後、休止期間をはさみながらも噴火は徐々に激しさを増し、噴出する火山灰は遠方まで運ばれ、東北地方でも降灰が記録されるほどとなった。

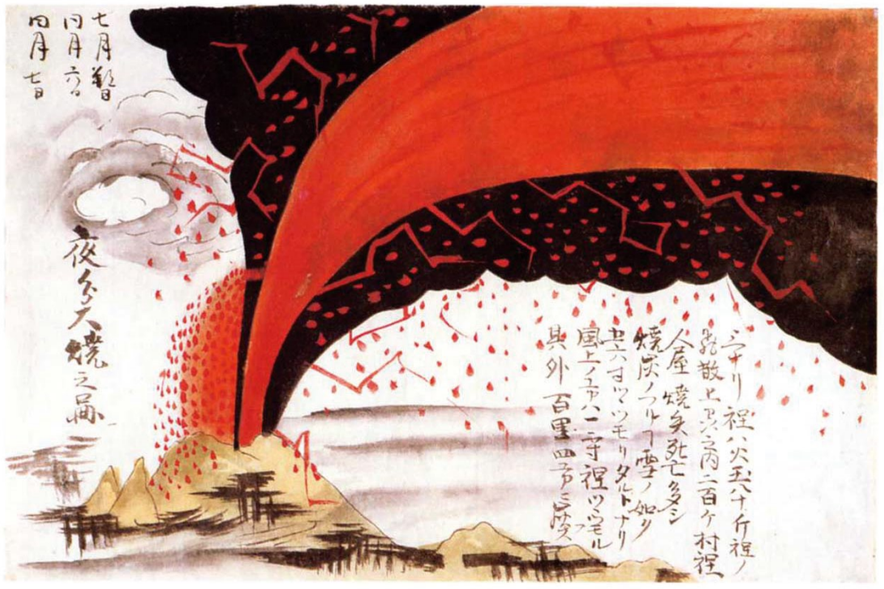
七月下旬頃になると断続的に噴火し、八月二日の夕方からは大きな噴火を繰り返した。八月四日には「噴火の音は百倍」に、「大地の揺れは千倍」と記されるほど激しさを増していった。火口より立ち上る噴煙は辺りを暗くし、昼間でも提灯（ちょうちん）の明かりが必要なほどとなった。

そして八月五日午前十時頃、浅間山は天明三年では最大の大噴火をするのである。

「鎌原土石なだれ」と「天明泥流」

火山災害といえば、火山灰や軽石による農作物への被害が思い浮かぶ。天明三年の噴火の際にも、浅間山の東南東方向を中心に厚く火山灰が降り積もり、農作物にも多大な被害を与えた。降り積もる火山灰の重さで、建物が倒壊することもあった。しかし、村を埋め、多くの人命を奪い、家屋を押し流すほどの甚大な被害は、「鎌原土石なだれ」とその後に発生した「天明泥流」によるものであった。

鎌原土石なだれは、八月五日の大噴火により発生した。火口からの噴出物や崩壊した山体の一部は土石なだれとなり、浅間山北麓を高速で流下した。この直撃を受けたのが、旧鎌原村である。2～10mほどの土石なだれで埋まった村は、住民の約八割、477名が犠牲となった。



浅間山夜分大焼之図

天明三年の浅間山大噴火を描いた絵図。絵図には「三十里ほど八十斤（約 50kg）の火玉が飛散」とある。噴煙は東側、群馬県側に流れている。（美斉津洋夫氏所蔵、浅間火山博物館提供）

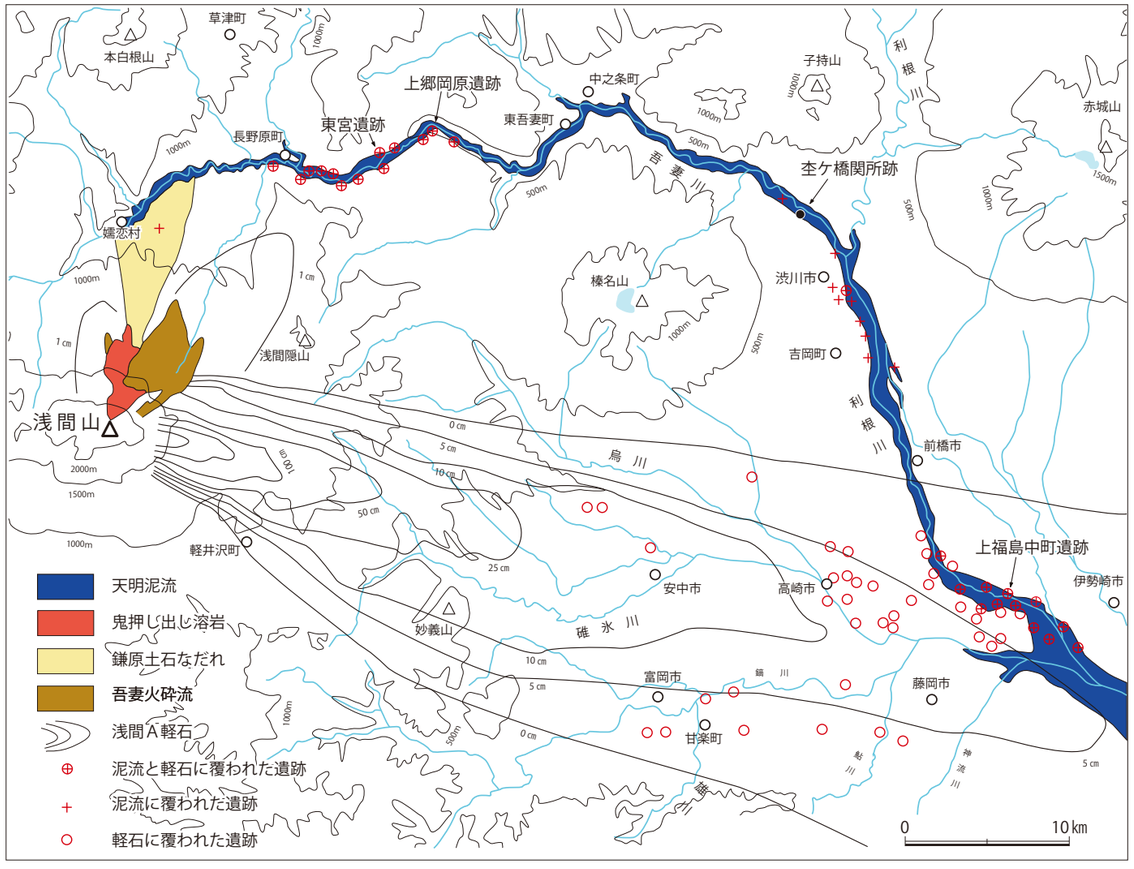
その後、鎌原土石なだれの一部は、浅間山北側を流れる吾妻川に流れ込み、大量の泥流となった。この天明泥流は吾妻川から利根川へと流れ下り、川沿いの村々を埋めながら、江戸や銚子にまで達した。これほど大量の泥流がどの様に発生したのかは明らかでないが、鎌原土石なだれと天明泥流による被害は、村数およそ 140、犠牲者およそ 1,500 名という甚大なものであった。

浅間山が大噴火したことで、大量の土石なだれや泥流が発生し、村を埋めていくとは、想像することもできなかった。

Point!

杢（もく）ケ橋（がばし）関所周辺の被害図

三国街道、杢ケ橋関所周辺の被害状況を描いた絵図。吾妻川沿いにあった関所周辺も、天明泥流により甚大な被害に見舞われた。（美斉津洋夫氏所蔵、浅間火山博物館提供）



天明三年浅間山噴火に伴う罹災遺跡（『自然災害と考古学』より転載、一部修正）

掘り出された災害の記憶

天明泥流で厚く埋もれた村には、当時の田畑や建物跡、それまで使われていた数多くの生活道具が残されていた。被災した人々にとっては大変不幸な出来事ではあったが、厚く覆う泥流が村を天明三年八月五日にとどめ、当時の景観や人々の生活様相、そして被災した状況まで今に伝えているのである。

長野原町東宮遺跡　川原畑村の一部。主屋や酒蔵、畑跡などが見つかる。村人が何を食べていたのか、どの様な職業であったのかなど、具体的な生活様相も確認できる。また古文書にも残らない、天明泥流から避難する際の様子も推測されている。

遺跡は、吾妻川河床から 40～ 50mも高い位置にあったのだが、ここまで泥流が達し、村を埋めた。泥流被害の凄まじさを物語る遺跡でもある。古文書に残る川原畑村の被害は、21軒が被災、犠牲者は４名であった。

東宮遺跡５号建物　天明泥流下の建物跡
厚く残る天明泥流を取り除くと、その下から建物跡が見つかった。写真に見えるのは、建物の床板である。

東宮遺跡１号建物　出土した団扇
天明泥流が、真夏である八月五日に発生したためか、遺跡には２点の団扇が残されていた。

東宮遺跡１号建物　出土した下駄
数多くの下駄や草履が残されていたが、亡くなられた人は確認されなかった。泥流から裸足で避難したと推測される。

玉村町上福島中町遺跡　浅間山から遠く離れた佐波郡玉村町でも、天明泥流で被災した村が発見された。利根川沿いにあった上福島村は、5cm ほどの厚さで残る浅間Ａ軽石の上に、１～２mの厚さで天明泥流が覆っていた。

遺跡からは、泥流と軽石の下より８軒の建物跡や田畑の跡が見つかった。古文書に残る上福島村の被害は、49 軒が被災、犠牲者は１名であった。

上福島中町遺跡　天明泥流下から現れた建物跡と畑跡
天明泥流を取り除くと、８軒の建物跡や田畑の跡が見つかった。右側は利根川。利根川を泥流が流下し、沿岸の村々を埋めていった。

書き残された火山災害と復興への足跡

浅間山の噴火被害については、数多くの古文書に書き残された。それらは、子孫への戒（いまし）めとして書かれたものや、領主への被害報告、救済・年貢減免などを願い出たものなど様々である。これら古文書に書き残された記録、そして地質学や考古学などの成果により、天明三年の噴火被害とその後の復旧・復興の様子が明らかになってきている。

田畑の復旧痕跡は、群馬県内の広範囲で確認することができる。具体的には、田畑を覆う火山灰や泥流を埋めるための溝（復旧溝）を掘り、そこから出た土を耕作土として利用した痕跡や、火山灰を混層耕（こんそうこう）あるいは反転すき込みしたと思われる痕跡（復旧痕）などである。甚大な災害にも負けない、人々の力強さが感じられる発見ともいえる。

一方で、復興への長く険しい道のりを感じさせるものもある。数mの土石なだれや泥流で厚く埋もれた村は、これを取り除くことができないため、その上に村を再建した。田畑も同様に泥流上面を耕作土としたためか、被災前の生産高に達するまでには長い期間を要したようだ。表１は、泥流で被災した川原畑村の年貢額の推移である。被災し、七分の一にまで激減した年貢額が被災前の状況へもどるには、長い時間を要したことが分かる。

また、田畑に厚く降り積もった火山灰を取り除き、一箇所に集めることも行われた。集められた火山灰の山を「砂山」「灰塚」などと呼んだ。これが大変な重労働であり、また、自身の田畑に火山灰の山ができることで耕作面積も減ることとなった。

天明泥流が流れ下った河川も、泥流による後遺症が残った。利根川は、烏川合流付近より上流に大量の土砂が残ったことで川底が上昇し、明治時代になっても洪水に悩まされた。

復興は、人々のたゆまぬ努力と長い時間を要したのだ。

前橋市田口上田尻遺跡　天明泥流を埋めるために掘られた復旧溝群。

高崎市上滝五反畑遺跡
火山灰を混層耕あるいは反転すき込みしたと思われる痕跡。

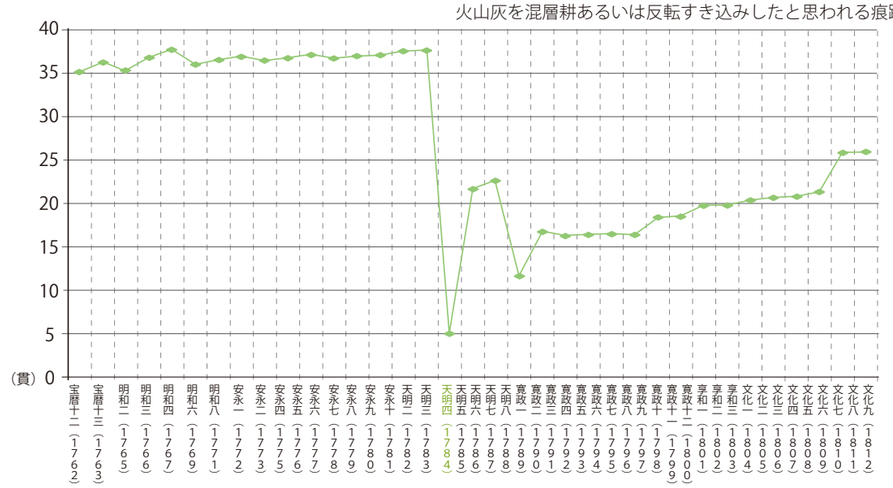
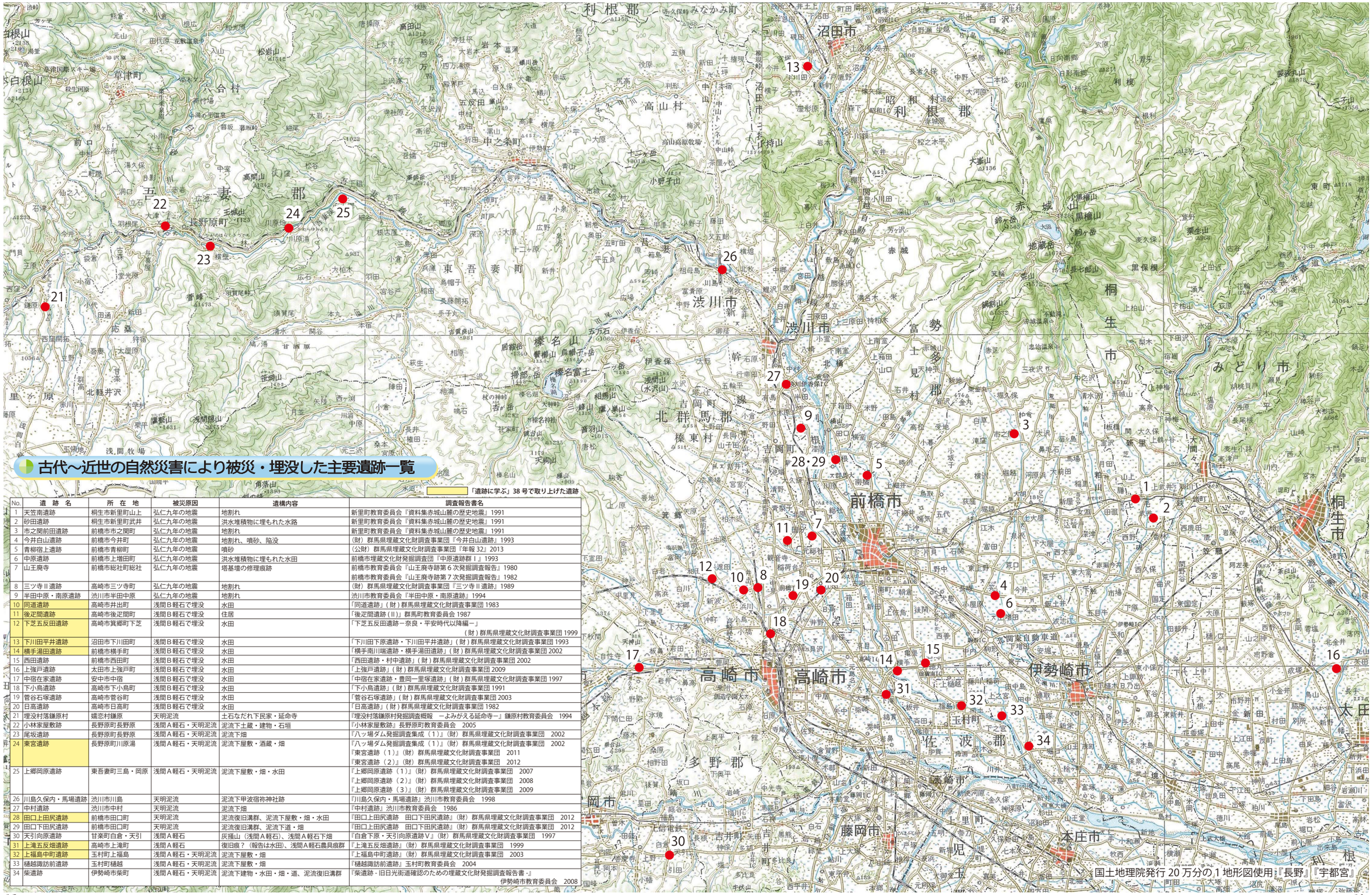


表１　川原畑村年貢皆済目録による年貢額の推移
年貢皆済目録（ねんぐかいさいもくろく）とは、年貢完納を証明する受領書。年号は翌年の皆済時。川原畑村の年貢額は、天明四年（同三年分）に大きく落ち込んだが、これが回復するまでには長い時間を要した。



古代～近世の自然災害により被災・埋没した主要遺跡一覧

「遺跡に学ぶ」38 号で取り上げた遺跡

No.	遺跡名	所在地	被災原因	遺構内容	調査報告書名
1	天笠南遺跡	桐生市新里町山上	弘仁九年の地震	地割れ	新里町教育委員会『資料集赤城山麓の歴史地震』1991
2	砂田遺跡	桐生市新里町武井	弘仁九年の地震	洪水堆積物に埋もれた水路	新里町教育委員会『資料集赤城山麓の歴史地震』1991
3	市之関前田遺跡	前橋市市之関町	弘仁九年の地震	地割れ	新里町教育委員会『資料集赤城山麓の歴史地震』1991
4	今井白山遺跡	前橋市今井町	弘仁九年の地震	地割れ、噴砂、陥没	（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団『今井白山遺跡』1993
5	青柳宿上遺跡	前橋市青柳町	弘仁九年の地震	噴砂	（公財）群馬県埋蔵文化財調査事業団『年報 32』2013
6	中原遺跡	前橋市上増田町	弘仁九年の地震	洪水堆積物に埋もれた水田	前橋市埋蔵文化財発掘調査団『中原遺跡群Ⅰ』1993
7	山王廃寺	前橋市総社町総社	弘仁九年の地震	塔基壇の修理痕跡	前橋市教育委員会『山王廃寺跡第６次発掘調査報告』1980 前橋市教育委員会『山王廃寺跡第７次発掘調査報告』1982
8	三ツ寺Ⅱ遺跡	高崎市三ツ寺町	弘仁九年の地震	地割れ	（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団『三ツ寺Ⅱ遺跡』1989
9	半田中原・南原遺跡	渋川市半田中原	弘仁九年の地震	地割れ	渋川市教育委員会『半田中原・南原遺跡』1994
10	同道遺跡	高崎市井出町	浅間Ｂ軽石で埋没	水田	「同道遺跡」（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団 1983
11	後足間遺跡	高崎市後足間町	浅間Ｂ軽石で埋没	住居	「後足間遺跡（Ⅱ）」群馬町教育委員会 1987
12	下芝五反田遺跡	高崎市箕郷町下芝	浅間Ｂ軽石で埋没	水田	「下芝五反田遺跡－奈良・平安時代以降編－」 （財）群馬県埋蔵文化財調査事業団 1999
13	下川田平井遺跡	沼田市下川田町	浅間Ｂ軽石で埋没	水田	「下川田下原遺跡・下川田平井遺跡」（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団 1993
14	横手湯田遺跡	前橋市横手町	浅間Ｂ軽石で埋没	水田	「横手南川端遺跡・横手湯田遺跡」（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団 2002
15	西田遺跡	前橋市西田町	浅間Ｂ軽石で埋没	水田	「西田遺跡・村中遺跡」（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団 2002
16	上強戸遺跡	太田市上強戸町	浅間Ｂ軽石で埋没	水田	「上強戸遺跡」（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団 2009
17	中宿在家遺跡	安中市中宿	浅間Ｂ軽石で埋没	水田	「中宿在家遺跡・豊岡一里塚遺跡」（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団 1997
18	下小鳥遺跡	高崎市下小鳥町	浅間Ｂ軽石で埋没	水田	「下小鳥遺跡」（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団 1991
19	菅谷石塚遺跡	高崎市菅谷町	浅間Ｂ軽石で埋没	水田	「菅谷石塚遺跡」（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団 2003
20	日高遺跡	高崎市日高町	浅間Ｂ軽石で埋没	水田	「日高遺跡」（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団 1982
21	埋没村落鎌原村	嬬恋村鎌原	天明泥流	土石なだれ下民家・延命寺	『埋没村落鎌原村発掘調査概報　―よみがえる延命寺―』鎌原村教育委員会　1994
22	小林家屋敷跡	長野原町長野原	浅間Ａ軽石・天明泥流	泥流下土蔵・建物・石垣	『小林家屋敷跡』長野原町教育委員会　2005
23	尾坂遺跡	長野原町長野原	浅間Ａ軽石・天明泥流	泥流下畑	『八ッ場ダム発掘調査集成（１）』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団　2002
24	東宮遺跡	長野原町川原湯	浅間Ａ軽石・天明泥流	泥流下屋敷・酒蔵・畑	『八ッ場ダム発掘調査集成（１）』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団　2002 『東宮遺跡（１）』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団　2011 『東宮遺跡（２）』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団　2012
25	上郷岡原遺跡	東吾妻町三島・岡原	浅間Ａ軽石・天明泥流	泥流下屋敷・畑・水田	『上郷岡原遺跡（１）』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団　2007 『上郷岡原遺跡（２）』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団　2008 『上郷岡原遺跡（３）』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団　2009
26	川島久保内・馬場遺跡	渋川市川島	天明泥流	泥流下甲波宿祢神社跡	『川島久保内・馬場遺跡』渋川市教育委員会　1998
27	中村遺跡	渋川市中村	天明泥流	泥流下畑	『中村遺跡』渋川市教育委員会　1986
28	田口上田尻遺跡	前橋市田口町	天明泥流	泥流復旧溝群、泥流下屋敷・畑・水田	『田口上田尻遺跡　田口下田尻遺跡』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団　2012
29	田口下田尻遺跡	前橋市田口町	天明泥流	泥流復旧溝群、泥流下道・畑	『田口上田尻遺跡　田口下田尻遺跡』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団　2012
30	天引向原遺跡	甘楽町白倉・天引	浅間Ａ軽石	灰掻山（浅間Ａ軽石）、浅間Ａ軽石下畑	『白倉下原・天引向原遺跡Ⅴ』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団　1997
31	上滝五反畑遺跡	高崎市上滝町	浅間Ａ軽石	復旧痕？（報告は水田）、浅間Ａ軽石農具痕群	『上滝五反畑遺跡』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団　1999
32	上福島中町遺跡	玉村町上福島	浅間Ａ軽石・天明泥流	泥流下屋敷・畑	『上福島中町遺跡』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団　2003
33	樋越諏訪前遺跡	玉村町樋越	浅間Ａ軽石・天明泥流	泥流下屋敷・畑	『樋越諏訪前遺跡』玉村町教育委員会　2004
34	柴遺跡	伊勢崎市柴町	浅間Ａ軽石・天明泥流	泥流下建物・水田・畑・道、泥流復旧溝群	『柴遺跡 - 旧日光街道確認のための埋蔵文化財発掘調査報告書 -』 伊勢崎市教育委員会　2008